

【レポート】バーバー(理容室)とバーを開業した二人の若者

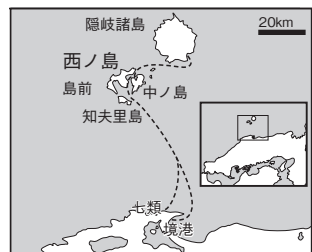
西ノ島町観光定住課長 福岡 章仁

全国的に人口が減少傾向にあるなか、西ノ島町も地域コミュニティ活動への影響が出る懸念されており、移住・定住対策を喫緊の課題として、Uイターン対策に力を入れている。

本町の人口は約二九〇〇人。そのうち一九パーセントがいわゆるイターン者である。イターン者増加の発端は、一九九〇年代にさかのぼる。基幹産業の一つである漁業(まき網漁ほか)において、高齢化などによる漁師たちの後継者不足が問題となった。そこで、水産会社と漁協と役場が協力して「漁業後継者確保対策事業」を立ち上げ、生活環境整備を行いながら漁師を全国募集した。現在、島に移住した漁業従事者は五九世帯一三七人。そのほとんどがこの事業を活用している。

一九九四年には、「大都会を離れ、老後は自然に恵まれた島でのんびりと暮らしてみませんか」というキャッチフレーズのもと、どちらかが五〇歳以上のペア(夫婦に限らず)を対象にした「シルバリアルカデア事業(高齢者移住計画)」を始めた。「若者がタメなら高齢者が安心して暮らせる桃源郷にすればよい」という逆転の発想で、当時の国土庁過疎対策室から「全国に前例のないユニークで斬新なプラン」と言われた。その効果か、九六人の移住があった。

島での就業先としては、漁業のほか役場、医療福祉関係、観光関係、土木建設関係などが主なものとなっている。近年、島で自ら生業を起こすUイターン者も現われ始めており、今年はずでに二人の若者が起業した。一人は故郷の西ノ島へのUイターン、もう一人は大阪からのイターンである。



西ノ島：隠岐諸島のなかで2番目に大きい島。面積55.79km²、人口2,885人(平成29年8月末現在)。天然の良港がある内海側に集落が点在。外海側は海蝕海岸が連なり、国賀海岸は隠岐を代表する景観として有名。漁業を中心に畜産、観光が基幹産業。



2017年にオープンしたBONHEUR。

理容を通して島の人々を幸せに

BONHEUR代表／Uターン 江馬大樹さん

故郷の島で理容室を開業

西ノ島町浦郷出身の江馬大樹さん（三六歳）は、高校卒業後に専門学校に進学し、理容師の資格を取得。その後、本土で一五年の経験を重ねた。この間、専門雑誌に登場するなど、ちよつとした注目を集める理容師として活躍したという。江馬さんは、「自分が育った島に店を出したい。

年齢的にもこのタイミングではないか」と考え、島に帰る決断をしたという。「店を開業し、理容業を通して幸せな時間を島の皆さんに提供したい」という明確な目標を持っている。

二人の共通点は、周りを明るくしてくれる元気の源で、笑顔あふれる青年たちであるということ。今回は、彼らが起業するまでの経緯と島での活躍ぶりを紹介したい。

実は、数年前に私は松江で彼と酒を酌み交わしたことがあり、そのときに「いずれは西ノ島に帰って、店を持ちたい」という話を耳にしていた。今回の江馬さんの帰郷および理容室の開業は、自分のことのように嬉しかった。

お店は彼の実家の敷地内に新築、四月から始まった有人国境離島地域の支援制度も活用して開業した。店名は「BONHEUR（ボナー）」。フランス語で「幸せ」という意味で、隠岐の方々笑顔になって、もっと楽しく幸せな人生を過ごしていただけのようにしたい」という江馬さんのメッセージが込められている。

店は、小さい子どもからご年配の方まで、くつろぎながら心地よい時間を過ごしてもらうために予約制としている。また、予約制とすることで、髪の毛を切っている間を使ってお客さんとしつかりコミュニケーションがとれるという。お客さんに「幸せな時間」を提供することを信条としている彼らしい工夫といえる。

移住者で隠岐を盛り上げたい

西ノ島が大好きな江馬さんは、「団結力」「仲良し」「顔見知りが多い」ことをその理由に挙げる。実際、Uターン後、幼なじみや顔なじみたちと一緒に若者などが集まる場に出して、島タイムを満喫している彼の姿をよく目にする。江馬さんの夢は、島のみんなを笑顔にすること。その実

現に向け「お客様に喜んで帰ってもらうこと」に全力を注いでいる。また、島の活性化に向けたUイターン者の受け入れにも積極的で、「一緒に隠岐を盛り上げていきたい」と、心のこもったメッセージをいただいた。

本土で生活を築いた若者が郷土に帰るタイミングは、とても難しい。江馬さんのようにしつかりした目標と意志があつてはじめて実現するものだろう。島内には数軒の理美容店はあるが、高齢化などで減少傾向にある。今年誕生した彼の店が、地域の新たな活力になることを期待したい。

協力隊の任期後にバーをオープン

BARくすのき代表／イターン 柴田暢樹さん

地域おこし協力隊として西ノ島へ

柴田暢樹さん(二六歳)が大阪府から西ノ島へ移住してきたのは二〇一五年五月のこと。大阪心斎橋でバーの店長をしていた柴田さんは、「いつか自分の店を持ちたい」という目標を持っていた。どこか地方で店を持っていかと移住先を探しているとき、西ノ島町の地域おこし協力隊の募集をインターネットを介して知った。「三六〇度どちらに行っても海があつて、大山隠岐国立公園の国賀に牛馬がいる環境が気に入って応募した」という。

彼は、地域おこし協力隊として、水産業や観光業の振興に従事。西ノ島の産業を体感しながら島について学び、自分から積極的に行動することで、町民にも親しまれていた。協力隊となつて七カ月後には消防団にも加入した。

これらが功を奏してか、浦郷地区に築年数の浅い旧飲食店舗を見つけることができて購入。開店資金には、地域おこし協力隊の起業を支援する制度も活用した。

五月二日にバーをオープン。開業にあたっては、両親にもしつかり説明したという。観光シーズンには西ノ島ガイドクラブの一員として、店の営業時間外にバスガイドなどをこなす。

自ら動いて地域に馴染む努力を

バーは、二次会に来るお客さんを想定して夜八時から深夜三時までの夜間営業を基本としている。もちろん一次会から貸切も可能で柔軟に対応。店には彼を慕う島内外の友だちがたくさん訪れるほか、島に宿泊する観光客なども来店。町民との交流の場として、島の若者が集う場として盛り上がっている。若者が好む酒類を仕入れたり、普段あまり目にしない珍しい缶詰を提供するなど、彼らしいユニークなメニューも人気だ。

国賀の自然環境が移住するきっかけとなつた柴田さんだが、いまでは「景色よりも人の魅力」と話す。「島の人の

やさしさ」「人と人のつながりの強さ」こそが西ノ島の魅力で、キーワードは「人」だという。まずは経営の安定が目標だが、将来的には「隠岐の特産品を店で提供するなど、幅広くPRしていきたい」と、展望を語る。

「積極的に外へ出て、一人であっても地域行事や飲み会に参加する勢いが必要。声をかけてもらうのを待つばかりではなく、自分から顔を見せることで親しくなり、次からはお声がかかるようになる。まずは自分から動くことが大事」



調理をする柴田さん。

と、Uイターン希望者へメッセージを送る柴田さんは、「今は仕事を楽しんでいる。味と実益を兼ねながら良い時間を過ごせている」と話してくれた。

■お手本にしてほしい二人の積極性

移住は人生の大きな決断となるが、江馬さん、柴田さんの二人のUイターン者が語る「人がやさしい」「人のつながり」「仲良しのまち」に惹かれて西ノ島で何かを始めようとする若者も増えている。先駆者である彼らのように、自分から積極的に地域に溶け込もうとする意識と行動

があれば、島の方々とも親しくなれるはずだ。

近年、「起業」という言葉が数多く使われている。資金や手続き面などのハードルが下がり、国や地方自治体による創業支援などが充実してきたこともあり、起業を目指す若者は増えているように思われる。

しかし、起業は転職と違って相当な覚悟が必要であり、自分の計画どおりに進まないことや、思うように売り上げが上がらないことが当たり前のように起きる。今回紹介した二人の若者の店は、幸いにして順調に進んでいるようである。これは彼らの人柄によるところが大きいのだろう。

二人の力が最大限に発揮されるように、地域や行政が協力して定住を支援していきたい。

隠岐ユネスコ世界ジオパークに認定された大山隠岐国立公園の島で暮らしてみませんか！

町内にはベッド数44床の隠岐島前病院や浦郷診療所もあり、移住のための支援制度や子育て支援制度も充実しています。安心して島暮らしを考えてみてください。詳しくは、西ノ島町観光定住課（TEL：08514-7-8131）までお問い合わせください。



福岡章仁（ふくま あきひと）

1967年、神戸市須磨区で生まれ神戸で育つ。2002年に妻と5歳、3歳の子どもを連れて家族4人で西ノ島町へ移住。市部来、離島暮らし15年。都市部にはない生活環境、特に子育て環境に満足したことなどを、Uターンの先輩として本音で移住希望者に伝えている。